
If you hope.

蓮花

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If you hope.

【著者名】

NZノード

【作者略】

蓮花

【あらすじ】

何もかもが上手くいかない。そんなある日、屋上で出合ったあの子との決して忘れない出来事。

放課後。学校の屋上には誰も居ない。

私は、フェンスに体を預けて空を眺めていた。冬の冷たい風が吹き抜ける。

何もかもが上手くいかない。そんな毎日に嫌気が差している自分を、少しの間だけでも良いから忘れない。それが毎日ここに来る理由だった。

「はあ……」

何度も目かの溜め息が漏れる。もう全てに疲れてしまった。

「何してるの？」

静かな屋上に、高くて綺麗な声が響いた。驚いて後ろを振り向く。そこに立っていたのは、同じクラスの吉沢さんだった。

黒く艶のある長めの髪に、ぱっちりとした黒い瞳、白い肌。誰もが振り向くような美少女だ。成績も学年トップで、学校内でもかなりの有名人で通っている。

そんな彼女が、どうしてここに？

「別に……ただ外を眺めてただけ。吉沢さんは？」

私は質問を返した。そういうば、彼女とともに話すのは初めてだ。いつも色んな人に囲まれていて、私が入る隙など無いのだから。

「私も、ちょっと外の空気を吸おうと思って」

彼女は少し笑って答えた。その笑顔でさえも、十分人を惹き付ける力を持っている。自分とは大違いだな、思った。

「私ね、一度ここに来て見たかつたんだ」

明るい声で話しながら、周りを見渡す。

「思ったより広いんだね。……いつもは同じに行こうにも誰かが着いてくるから、一人になる時間が無くて。今日は何とか皆から離れてここに来たんだ」

周りの風景から、私へと視線を移す。黒い瞳は少女のようにはキラキラと輝いていた。

「そう……なんだ」

彼女にも、色々と大変なことがあるんだ。

「人気者も楽じゃないんだね」

つい思つたことを口にしてしまつた。嫌味だと思われたかな、と少し心配になる。

「フフ、まあね」

しかし私の心配をよそに、彼女は笑つて返してくれた。多分、もう慣れっこなのだろう。

「立花さんは、よくここに来るの？」

ふいに彼女が尋ねた。

「うん。最近はよくここに来てる。……ここに来ると、嫌な事とか忘れられるから」

「ふうん……そうなんだ」

「うん」

会話が途切れると、彼女はまた辺りを見回し始めた。その姿は無邪気な子供のようだ。

「吉沢さんにはさ、何もかもが上手くいかない時つて無いの？」

「え？」

私が聞くと、彼女はまた私へと視線を動かした。

「上手くいかない時？　うーん……あるかもしれないけど、気にしないようにしてるかな」

彼女は答えたが、私が突然こんな質問をしたからか、少し不思議
そうな顔をしている。

「前向きなんだね。私なんか、何やつても上手くいかなくて……

もう……死んじゃいたいよ」

「冗談ぽく言つたつもりだつたが、作った笑顔が引きつっているの
は自分でも感じていた。

どうして今日初めて話した人にこんな事を言つていいんだりう？
もう自分の全てが嫌になる。

「じゃあさ、私が殺してあげよつか？」

自分の耳を疑つた。田の前の彼女を凝視する。

「…………？」

彼女からは、今までの明るさや笑顔が全て消えていた。
あるのは、美しすぎる仮面のような顔。

「死んじやいたいんでしょ？ だったら、私が殺してあげる」

彼女の言つている意味を理解するまでには時間が掛かった。冗談
で言つているようには見えない。彼女の中にある確かな殺意を感じ
た時、私は身が凍るような恐怖を覚えた。

「吉沢……さん？」

私は震える声で彼女に呼び掛ける。

気が付くと、彼女の右手には銀色に光る鋭い「何か」が握られて
いた。

それをゆっくりと、丁度自分の顔の横に構える。

夕田に照らされたそれは、手術で使われるようなハサミだった。
そしてゆっくりと、一步ずつ……近付いて……

「吉沢さん？ ねえ……嘘でしょ……」

彼女の瞳は、恐ろしいほど冷たく光っていた。もう私の声は届かない。人形のような無表情が、さらに私を恐怖に落とし入れる。

一步……また一步

「ねえ、どうしちゃったの？ やめて……イヤ……」

背後には、鋸び付いたフエンス。そして、田の前には……逃げる場所など何処にもない。

一步……また一步

「やだ……やだ……」

体が動かない。蛇に睨まれたかのように、彼女の冷たい瞳から田を逸らすことが出来ない。

ついに私と彼女の距離が数センチになつた。

「い……や……」

殺される……。

真っ赤な夕田に照らされて銀色に輝くそれは、弧を描き……
私は思いきり田を閉じて、叫ぶ。

「いや！ 死にたくないよーー！」

すぐ耳元で、金属のぶつかり合ひ音が聞こえた。
ゆっくりと、田を開ける。

そこには、吉沢さんがいた。今までのことが夢だったのかと疑う程、綺麗で優しい笑みを浮かべて。

「あ……れ……？」

しかし、すぐ左横には間違いなく銀色のハサミが刺さっていた。ファンスの網の部分に見事に食い込んでいる。

「どう、して……？」

立花さんが、死にたくないって言つたからだよ
握っていたハサミから手を離し、右手を軽く動かしながら彼女が答えた。

まるで、何も無かつたと言つよ。

「じゃあ、もし私が何も言わなかつたら……？」

「さあ、どうかな」

笑みを絶やさず明るく話す彼女を見ていると、さつきの事が全て嘘のように思えてくる。

「あ、そろそろ帰らなきや。じゃあ、また明日ね」

そう言つと、ぐるりと踵を返して出入口の方へと歩き出す。

ドアに手を掛けた時、彼女が不意にこちらを向いた。

「死にたいなんて、簡単に言わない方が良いよ」

私がその言葉を聞いた時には、彼女はもう消えていた。

(後書き)

If you hope .

あなたが望むなり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1539d/>

If you hope.

2010年10月8日15時06分発行